

## 身体図式とは何か

### What is the body schema?

坂倉 涼

Ryo SAKAKURA

#### 要旨

本稿では、身体図式の一人称的な位相を明らかにする。はじめに、身体が世界を持つとはどのようなことであるかを、メルロ＝ポンティの議論を追うことで明確化する。次に、情報活用の主体、また行為の主体を「私」として特徴づける。この「私」は感覚運動的主体として存在している。そしてこの主体は自己中心的空間（egocentric space）で活動すると論じる。その上で、身体図式を、この自己中心的空間を主体に対して開く主体の能力、として特徴づける。したがって、身体図式は、この意味で極めて一人称的である。それは、三人称的な身体像と対照をなす。以上の分析に基づき、最終節では、自己中心的空間の中心に位置する身体が自分自身の身体であると私が判断するのはなぜなのか、ということを一明らかにする。私は、自分の身体像が自分自身の身体についての像であることを、なんらかの同一性規準に基づいて判断しているのではない。ある身体像を自分自身の身体の像であると理解する時、私の主体性が極めて本質的な仕方に関係してくる、と論じる。

#### Abstract

In this paper, we clarify the first-person phase of the body schema. First of all, we clarify what it means for the body to have a world by following Merleau-Ponty's argument. Then, we characterize both of the subject of information utilization and the subject of action as "I". This "I" exists as a sensorimotor subject. We argue that this subject operates in an egocentric space. Then, the body schema is characterized as the subject's ability to open the egocentric space to herself. Therefore, the body schema is extremely first-person in this sense. It contrasts with the third-person body image. Based on the above analysis, the final section clarifies why I judge that the body located at the center of the egocentric space is my own body. I do not judge that my body image is the image of my own body based on any identity criteria. I argue that when I understand a certain body image as the image of my own body, my subjectivity is involved in a very essential way.

## 1 知覚経験に関する一般的考察

まずは、本節と次節を使い、身体図式を試算的に特徴づける。身体が世界を持つとはどのようなことかを、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』の議論を大域的に参照し、まとめることで、この課題を果たす。身体図式という既成の概念を新たに編み上げ、身体像と明確に区分したのはメルロ＝ポンティである。そこで、身体図式を特徴づけるために、その身体図式を有する主体の（主に外界に関する）知覚経験のあり方を、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』と Gallagher (1998) における議論に依拠しながら以下考察する。

知覚の恒常仮説によれば、条件が等しければ、同じ刺激は同じ経験を生み出す。いま、地平線の先の月を眺めているという経験を考える。何もない空間をはさんで、たとえば凧いだ海原や湖面をはさんで月を眺めるより、さまざまな建物に覆われた地表のその先に月を眺める時の方が、月は大きく見かけられる。恒常仮説が言及していた「条件が等しければ」の「条件」が異なっているのである。では、そのような条件の違いは月の知覚経験にいかなる仕方で貢献しているのだろうか。たとえば私たちは、ビルや家屋が立ち並んだ都市をはさんで月を眺めている時、「自分と月の間にこんなにも多くの要素が介在しているのだから、月は相当遠くにあるのだろう。遠くにあるならば、月は実際の大きさより今小さく見えているはずだ。本当はもっと月は大きいはずだ」と意識的に推論したがゆえに、月の大きさに関して、都市をはさんだ場合の方が海や湖面をはさんだ場合よりも大きいものとして「解釈」しているということなのだろうか。つまり、背景的諸信念の連関が事態を説明してくれるのだろうか。

都市や海、湖面が月の知覚経験のあり方に貢献しているのは明らかである。だがそれは前段落で述べたような推論などの理性的活動の働きがなす貢献なのだろうか。メルロ＝ポンティは、デカルトやカントを代表とするこのような主知主義的な立場を採用する解釈を斥ける。それでは、一方の振り子の極限としての主知主義の解釈が誤りならば、振り子のもう一方の極の、因果的機構や知覚の原子論的要素主義を主張する立場である経験論からの解釈が正しいのだろうか。また経験論にしたがって、都市や海は「原因として」月の見かけの大きさの差異に貢献しているのだろうか。しかしメルロ＝ポンティは、こちらの選択肢も選ばない。経験論の述べるような完全に生理学的な観点からの説明も、不十分なのだ。

生理学的な観点のみに閉じこもるような仕方では、上述の月の知覚の経験は説明されない。メルロ＝ポンティによれば、都市や海、湖面といった要素は月の知覚経験に対して「動機」(motive) としての資格で介入する。そこには主体の「決断」もまた介入するのであって、完全に物理学的、生理学的な、知覚に関する因果的機構の観点からこの月の見かけの大きさに関する経験を説明しきることはできない。だからといって、その決断というのは主知主義が述べるような完全に知性的、理性的な決断でもま

たないだろう。

知覚の恒常仮説は維持できない、とメルロ＝ポンティは論じる。ごく単純な刺激に関しても、それが生体に与えられる時には、その刺激はその時の世界の全体的状況がいかなるものとしてあるかということからの負荷を担い、それらから規定される仕方ですべて私たちのもとへとやって来る。生理学的に同一の刺激とされるものでも、状況に応じて異なった意味を帯びる。メルロ＝ポンティのあげる例ではないが、そして些細な例であるが、次のように言えるだろう。たとえば私たちが極度の疲労にある時、世界、状況は「なにかこちらを脅かしてくるようなもの」として脅威の色調に染まっている。そこからやって来る個々の刺激は、あたかも私に敵対しているかのように、刺々しさを持って私に触れてくる。逆に、安心感に包まれている時、刺激は総じてある種の温かさ、優しさを伴って私に触れてくる。このように、私たちは自分の在り方をいわば状況に「投射」しており、状況は私たちの在り方を私たちに対して表出している。その状況に規定された形で、刺激は私たちへと触れてくるのである。生理学的な事実のみが私たちの経験を説明するのではない。私たちは世界に対して実践的に調節されており (practical attunement)、生理学的な刺激は、その実践的調節に見合ったかたちをとって私たちに与えられる。ある状況では生体に与えられて生体の意識的経験へと浮上する同じその刺激が、実践的調節の在り方如何によっては、意識的経験へとのはびっては来ない。したがって、メルロ＝ポンティによれば、刺激と経験の要素的一対一对応を主張する恒常仮説の立場は、受け入れられない。

## 2 主体が世界を持つということ

知覚において刺激が全体的状況に規定された姿でしか私たちに触発しないという事実は、知覚者として私たちが世界、状況を保有しているということを含意している。メルロ＝ポンティは次のような例をあげている。ある昆虫は、脚の一本を失うと、残っている脚を協働させながら状況からの空間的課題に応えようとする。その際、失った脚はもう行動の勘定に入れられていない。しかし、その同じ昆虫は、脚をつかまれた際には、そのつかまれた脚をまだあてにして、その脚が存在することを勘定に入れていると思わせる仕方で振る舞う。

最初の事例で、昆虫の脚の運動にかかわる因果的機構が自動的に作動することによって、失った脚がもはや機構の働きの要素として機能しなくなったのだ、と経験論的に説明するならば、なぜ脚をつかまれた時にはその同じ因果的機構は直ちに働かないのか、ということが説明されないままになる。また、昆虫は知的な判断により自分の運動図式から失った脚を除外したのだ、と考えるなら、昆虫特有の盲目的で機械的、自動的な本能的活動のレベルを低く見積もりすぎだろう。経験論も主知主義もうまくいかない。

メルロ＝ポンティによれば、この昆虫の本能的レベルにとっても「世界を持つ」ということが重要なのであり、脚をつかまれた際、昆虫は世界、あるいは状況から自身に課せられる空間的な運動の課題に対処するために、まだつかまれた脚をあてにしているのに対して、脚を失った際には、失った脚をもはや見限り、見捨て、残った脚だけの全く新たな体制のもと世界、状況に応接しようとしているのだ。いわば、「完全にそろった脚で対処すべき世界」へと実践的調節がなされていた段階から、「一本脚が失われた生体機構で対処すべき世界」へと実践的調節を変更させたのだ、ということもできるだろう。脚をつかまれただけの昆虫は、いわばまだこの移行を行っていない。

事故などで失った手足がいまだ存在するかのように感じられ、場合によってはその失ったはずの身体部位に痛みすら感じる患者の事例、幻影肢(痛)の事例を考えよう。たとえば、腕を失った場合であれば、失った腕の断端からの求心性神経路を切断すると、幻影肢は消える。ではこれは、経験論的枠組みで説明しきることができる純粋に生理学的事象なのだろうか。しかし求心性神経を切断しなくとも、心理学的なカウンセリングなどの作用により、幻影肢痛が(あるいはまれに幻影肢そのものが)消えることがある。生理学的とも心理学的ともとらえることができるこの幻影肢の事例を、どのように考えればよいのか。

メルロ＝ポンティは、ここでも世界を持ち出して説明を与える。いわば患者は、まだ腕が健全であった場合に対処できた世界の中で生きることを諦めていない。腕はもはや存在しないのに、腕を伸ばしてつかむべきものとしてのそこにあるグラスは、まだ主体の動作を誘引し続けている。もちろんここで「諦め」といっても、心理学的な決断のことが言及されているのではなく、身体的な決断、と言ってもよいような次元が問題にされている。腕が存在することを前提としたうえで扱うことが可能となっていた空間的な課題や事物に、患者はいまだ応接しようとしている。

また病態失認において、患者は、もはや自分の腕が動かなくなったことを認めようとはしない。このような態度においても、患者は(意識的な決断のレベルにおいてではなく、身体的な了解のレベルにおいて)まだ腕が健全であった際に対処可能であった一連の状況の課題に、今までと同じような仕方で応接しようとし続けている。

このように、自分の障害がほぼ確定的であってもそのことを認めない患者がいる一方で、自分の障害がまだ生活の委曲に影響しない軽度なものであっても、自分の側から以前までの生活を手放してしまう(自分の側から患者に「なって」しまう)といった事例も存在する。これらは、世界と身体との実践的調節の不具合の事例と考えてもよいだろう。自分の身体の生理学的状態だけがそれら患者の疾患を規定しているのではない。彼ら彼女らが状況を生きる仕方が、彼ら彼女らの病態を重要な点で決する要因となっている。

主体の有する世界、状況は主体にとって両価的、両義的であるとメルロ＝ポンティは述べる。失った足がまだあると考えるからこそ歩こうとして、その結果転び、足が

ないことに直面する。足を存在させているかのように主体に思わせている状況こそがまさに、主体に足はもうないと思い知らせるその同じ状況である。病態失認において、もう動かせない腕のことを、患者は死んだ長い蛇のようだと記述する。主体は、ある意味で、自分の腕がもう動かないことを知っている。自分の麻痺した左腕を動かせるかと問われて、右腕を動かすことで麻痺などしていないと頑強に（本人においては誠実に）主張する患者のように、患者はある意味で、自分の動かない腕がどこにあるかを身体的に知っている。そうでなければ、そんなにうまく麻痺の事実を迂回することなどできないはずだからだ。主体は、腕がもう動かないということを知るある種の仕方においてまさに腕が動かないことを知らないのであり、あるいは、腕が動かないことを知らないある種の仕方においてまさに腕が動かないことを知っている。

以上、生理学的事実の範囲内に収まりきれない主体の身体理解を記述してきた。生理学的事実が無用だというのではもちろんない。生理学的事実（経験論のレベル）に尽くされないが、心理学的事実のレベルまで（理性的判断、決断といった、主知主義のレベルまで）、つまり意識的経験のレベルまでは到達しはしないような、身体的経験のレベルが存在するということである。この身体的経験のレベルを記述するために、メルロ＝ポンティは「身体図式」という用語を採用した。つまり、経験論と主知主義の間の「隘路」で機能するような身体次元である。

以上メルロ＝ポンティの議論を下地として、身体図式を以下のように特徴づける。身体図式とは、実践的調節のもとで世界と知覚的、行為的に関わるための、主体が有している技能的、習慣的な、空間把握能力、また空間内での行為能力のことである。

### 3 身体図式と身体像

身体図式の詳しい特徴づけに入る前に、身体図式と身体像の区別を確認しておこう。身体像と身体図式には、次のような違いがある。身体像とは、観察に基づいて知られる<sup>1</sup>人間の身体について私たちが有する、知覚、イメージ、信念、感情などのことである。一般的に、ある人の身体像は、その身体像がその人についてのものであるところの特定の人ただ一人にではなく、原理的に誰にでも、認識的にアクセスすることが可能なものである。身体像は、客体的身体についての知覚、イメージ、信念や感情と言い換えてもよい。身体像とは、三人称的に認識的なアクセスが可能（つまり誰にでもアクセス可能）であるところの、生物学的な対象、皮膚、筋、腱、骨格、内臓、神経系、といった物理的存在物がまとまって構成しているところの対象物（つまり人間の身体）についての、知覚、イメージ、信念、感情のことである。身体像はこのような身体が観察されることで認識者に与えられるものだが、その際、認識者が誰か（たと

---

<sup>1</sup> このことが身体像とは何かという理解にとって決定的に重要である。つまり、身体像とは三人称的に（誰によっても）観察可能なものであり、一人称的な身体図式と対照をなす。

えば、その身体像がその人についてのものであるところの特定の人であるか否か) ということによって、与えられる内容の内実が異なることはない。

それとは対照的に、身体図式はその身体図式の保有者とそれ以外の第三者とに対して、同じ相のもと与えられるものではない。身体図式は、一人称的主体と深いかかわりを持っている。身体図式と言った時、まずそれは何よりも「私の」身体図式である。この身体図式は、主体の感覚と運動の結合性という観点から解明することができる。本稿では主張する。本稿の立証したいテーゼは、身体図式とは認識（感覚）と行為（運動）とを接合する主体（私）の能力である、というものである。

#### 4 感覚運動的主体の発生機序に関する思弁

では、身体図式を感覚運動性から特徴づける前に、感覚運動性の一般的な特徴づけを行っておこう。そのために、まず感覚運動性というものの起源に関して手短な思弁を展開しよう。本稿では、議論が進むにつれて、感覚する主体を、外界に存在する情報の活用主体として、また運動する主体を、そのように情報を活用しつつ自分が何を行うかを決定し、その決定された行為を遂行する、行為の主体として、次第により広い概念的枠組みのもと記述することになる。

しかし、まず非常に原始的な感覚運動性の芽生えから話を始めよう。あるいは、感覚運動性の不在の事例と対照させて感覚運動性の特徴づけを与えることにしよう。

非常に原始的な生命体、たとえばアメーバなどでは、まだ感覚と運動は分化していないと考えられる。アメーバは、触れることで対象物を認識するだろうが、対象に触れるためのその器官（感覚器官）はまた、捕食の器官（運動器官）でもある。そのような感覚と運動が分化していない生命体において、主体の側ではなく対象の側においても、感覚面と運動面はまだ分化していないだろう。「感覚される物」はそれ自体「運動が作用する物」とまったく同一であると思われる<sup>2</sup>。

しかし、非常に原始的なものであるとしても、感覚運動性が成立している生体には、感覚面と運動面の分化が成立しているのでなければならないと考えられる。この感覚面と運動面の分化のためには、視覚などの遠隔知覚の能力を生体が保有していることが必要である。遠隔知覚の能力によってこそ、生体に「認識」と呼べる何事かが成立する。

遠隔知覚とは、対象に物理的に接触する以前の段階においてその対象物から影響される、生体の特別な能力のことである。つまり認識能力である。向こうから猪がやって来る様子を、私は視覚によって遠隔的に捉える。まだその猪と物理的に接触していないにもかかわらず、私はその猪の存在に影響された仕方での自分の行為を選択する可能

---

<sup>2</sup> このようにして世界の対象に関わる生命体の余韻は、私たち人間にも残存しており、それは近接知覚、代表的には「痛みの感覚」であると、バルクソンは述べている。破壊的要因となる事物が身体に接触していることの認知が痛みであるからである。

性に直面している。たとえば状況が危機的ならば、生存欲求に媒介された形で<sup>3</sup>、「闘争か逃走か」という課題が私に提示される。遠隔知覚は、生体と対象との間に不在の空間を開くだけではない。「これからいかに振舞うか」ということを考える時間的猶予をも生体に与える。感覚運動的スキルは、行為の遂行時点を未来にまで繰り延べする能力と言い換えることもできるかもしれない。そのようなことが可能なのも、遠隔知覚の働きによって、主体にまだ闘争しているわけでも逃走しているわけでもない時間的余白が与えられるからである。つまり、感覚運動性の成立は生体に空間的間隙と時間的間隙を与える。生体は諸対象とは空間的な隔たりを、自分の行為にはその時間的隔たりを持つことで、「世界」を持つことになる。感覚面については、それが一人称的であることを、次節では論じる。

生体の側で感覚と運動が分化する様は、対象の側で感覚面と運動面が分化する様と相関している。対象は「見える」とともに「触れられる」ものであり、感覚運動的主体にとっては、対象は感覚面と運動面の二面性を持っている。生体の感覚と運動を架橋するのは、主体の側（生体の側）で言えば身体図式であり、このことを様々な特徴づけから解明するのが本稿の課題だが、対象の側においても、まさに対象こそが、感覚と運動を媒介することによって、両者を連係させるのに重要な役割を担っている。

対象が感覚と運動を媒介している。私たちは、認識によって外界から情報を得る。単に対象を観察するためではない。行為へと向けて情報を活用するためだ。私たち人間主体の活用する情報は、私たち自身の行為を志向している。赤い熟れたイチゴと青いイチゴを認識するならば、栄養を得たいという欲求を介在させて、この情報は赤いイチゴの方を口に持っていくという行為を誘発する。熱湯が鍋に入っているということを知覚することは、なにか食事を作りたいという欲求を介在させて、その熱湯によって食材をゆでたり煮たりする行為へと私を導くかもしれない。コップの取っ手は、その中の飲み物を飲みたいという欲求を介在させることによって、その取っ手を手でつかむという行為を誘発するかもしれない。

対象、物の感覚面（たとえば視の側面）と運動面（触の側面）に関しては、運動面の方が重要である。対象の感覚面は、認識主体の欲求を媒介させて、主体の運動面へと接合される。感覚面に運動面を描出すべきという要請が課されている理由は、私たちには運動面こそが重要であり、私たちの至上の課題、欲求が「物理的世界の中で生き続けよ」というものであるからである。運動面で私たちの身体が破壊された時、私たちは生きるのをやめる。感覚面は、私たちが運動面で生き残るのに資する限りにおいて私たちにとって重要である。

以上、感覚運動性の特徴づけを行ってきた。感覚と運動が生体において分化するとは、対象、物に関する距離のある知覚（遠隔知覚）という形で空間的余白が、そして

---

<sup>3</sup> 視覚印象を捉えるための器官である眼が存在し、聴覚印象を捉える器官である耳が存在するようには、欲求の内容を捉えることに特化した器官は存在しない。このように欲求は特別であるが、本稿では欲求とは何かという問題の考察は行わない。

現在の行為に関する決断の猶予という形で未来の行為までの時間的余白が、つまり環境世界が生体に対して開かれるということである。そして、私たちは感覚面で獲得した情報を自らの行為へと活用していく。6 節で身体図式を空間性の観点からより一層特徴づける前に、次節では、この感覚面で自己の一人称性が際立ってくる様を論じることにする。

## 5 感覚的側面における主体の一人称性

自己中心的空間について 6 節で論じるが、その前に、本稿がそれによって身体図式を規定する感覚運動性が、その感覚面において持つ際立った一人称性について本節で論じる。メルロ＝ポンティ以前において（そして現在でも心理学分野において多くは）、身体図式は姿勢制御、運動制御の機構と関係すると見なされ、身体図式は、制御機構の一部として主体の意図の外側で働くサブパーソナルな、自動的で全体論的なプロセスとして考えられてきた。しかしメルロ＝ポンティは、ここまで論じてきたように、「状況を生きる主体」の観点から身体を捉えなおし、因果機構論（経験論）にも理性的判断の領域（主知主義）にも収まりきれない身体の相を明らかにした。S.ギャラガー（Shaun Gallagher）は、メルロ＝ポンティが焦点を当てたこのような身体の相を「前ノエマ的（prenoetic）と名付け、その働きの詳細を辿っている。その際にギャラガーが考察した二つの事例は、ギャラガーと異なる狙いのもとで、本稿の考察にとって重要である。ギャラガーは、次の引用箇所、意識的経験が始まる前に前ノエマ的に働く身体図式を、サブパーソナルで自動的なプロセスとして、記述している。

たとえば、眼精疲労の場合、やってきた頭痛が主体に気付かれる前の段階において、身体は、自動的な姿勢制御、運動制御を開始する。読書に浸るなかで、たとえば、主体は、テキストをやぶにらみし、テキストに近づくことを含む、身体の調節に関して、判然とした意識を形成していない。身体はこれらの機能を、この環境にあって課せられてくる要求に対処しながら、主体の反省的意識なしで遂行する。しかしそのような前ノエマ的調整は、重要な仕方で志向的内容を決定する。眼精疲労の事例では、身体図式の調整はまずはじめに、環境、あるいはテキストが問題含みであるとして主体がそこへと注意を固定することを動機づける。照明がやけに薄暗く感じられる；本が難解に、あるいは退屈になる（Buytendijk 1974）<sup>4</sup>。姿勢制御は、主体の注意を身体からそらし続けることで、主体が読書を続けることができるようにする；しかし最後に、そのような調節でも不十分になり、主体に身体的不快さと募りゆく頭痛を気づかせることになる<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> Buytendijk, F.J.J. 1974. *Prolegomena to an Anthropological Physiology*. Translated by A. I. Orr. Pittsburgh: Duquesne University Press.

<sup>5</sup> Gallagher (1998), p. 233f.

本稿がこの例で注目したいのは、主体が情報からいったい何を読み取るか、あるいは何についての情報を読み取っているのか、という点である。眼精疲労にあって、まず問題の根が外界に求められる。主体は、まず初めに自分の置かれている問題状況の根を、照明の暗さ、本の難解さや退屈さに求める。そのあと、前ノエマ的な身体図式の働きでは状況が持ちこたえられなくなり、最終的に主体は問題を自分自身の側に、つまり眼精疲労に関係させることになる。

つまり情報は、本に関するもの（外界特定の情報）として最初受け取られていたが、のちに自己に関するもの（自己特定の情報）に読み替えられている。情報が外界特定のなものであるか自己特定のであるかの決定を、何が行っているのか。おそらくこの点に身体図式は重要な仕方で関わっているだろう。

また、本稿では同種の論点を呈示するものとして、ギャラガーが上記の引用とは違う文脈で記述している次の例を手掛かりにしよう。

視覚が姿勢とバランスの固有感覚（*proprioceptive sense*）に貢献していることはよく知られている（e.g. Jouen 1998）<sup>6</sup>。しかし、姿勢とバランスが、自分たちを取り巻く環境を私たちがいかに知覚しているかに互恵的（*reciprocal*）な仕方で貢献していることもまた事実である。眼球の位置あるいは運動と、全体的な身体姿勢の空間的組織化との間には密接なつながりがあることを、実験的研究は示している（Roll and Roll 1988, 159）<sup>7</sup>。外眼筋の振動はバランスにおける身体の揺らぎと移行（*body sways and shifts in balance*）を結果させる。しかしまた、振動が与えられることで全身姿勢を変化させる固有感覚的パターンは、知覚される環境における変化としても解釈される。暗闇における光点を単眼で見る実験状況下で、「首の筋肉を振動させることで [...] また、さらに驚くべきことに、足首の姿勢筋を振動させることで、視覚的ターゲットの方向性のある移動が引き出された、」つまり、頭部、あるいは全体的身体の、振動によって惹起された姿勢の変化は「暗闇の中で静止している被験者によって、あたかもターゲットが上方に位置移動したかのように解釈される」（Roll and Roll 1988, 162）。身体図式の組織化に密接に関連する情報としての固有感覚的情報における変化は、視覚的知覚における変化へと導かれる<sup>8</sup>。

以上の引用においても、主体自身の姿勢やバランスの変化を知らせるはずの情報が、

<sup>6</sup> Jouen, F. 1998. "Visual-Proprioceptive Control of Posture in Newborn Infants." In *Posture and Gait: Development Adaptation, and Modulation*, edited by G. Amblard, A. Berthoz, and F. Clarac. Amsterdam Excerpta Media.

<sup>7</sup> Roll, J.-P., and R. Roll. 1988. "From Eye to Foot: A Proprioceptive Chain Involved in Postural Control." In *Posture and Gait: Development Adaptation, and Modulation*, edited by G. Amblard, A. Berthoz, and F. Clarac. Amsterdam Excerpta Media.

<sup>8</sup> Gallagher (1998), p. 239.

主体の置かれた環境の変化に関する情報として解釈される可能性があるということが述べられている。主体の変化を知らせる情報と、環境の変化を知らせる情報は、このような互恵的な仕方に関係しあっている。ある情報が、外界特定の情報としても自己特定の情報としても解釈されうる。

そして注目すべき点は、このように環境の変化に関する情報と互恵的に関わると見なされる主体自身の身体に関する（姿勢やバランスの）情報の変化は、あくまでも「私」に関するものであるという点である。それと対照するならば、他者の姿勢やバランスにおける変化を私が確認したとしても、私はその同じ情報から環境に関する変化を直ちに導出するということはない。

第一の引用に示されているように、私は自分の眼精疲労を、本を読むことを通じて知る。また、第二の引用においても、私の注意は外界に注がれている。外界を知覚することを通して自己身体の在り方に関して知を得る回路が、私の中に開かれている。世界が私自身を私自身に媒介している。しかし私は、外界を観察するだけでは、他者の身体について直接的には何らかの知を獲得するということはない。自己身体についての知が、外界の知覚を経由し、外界の知覚に媒介されて達成されるのと、対照的である。

私の外界に関する知覚経験においては、このような事情が成り立っている。私はこの情報を自分の自由な行為へと向けて活用する。私は、ある時は情報を外界特定のなものとして、またある時は自己特定のなものとして利用する。以上、感覚運動性の感覚面を本節では論じてきたが、では運動面はどのような姿をとっているのだろうか。遠隔知覚によって感覚面において対象との距離を介在させた知覚が可能になると、それに伴い、主体には行為のために自由になる時間的余白が与えられる。では、私たち人間においてこの空間的、時間的余白が開かれているとは具体的にはどのようなことなのか。次節では、この点を、空間性がそもそも行為の観点から個別化されているという点に注目して、論じる。

## 6 自己中心的空間と「私」

本節では、感覚運動的機構を自己中心的空間の観点から捉えなおす。また自己中心的空間の身体空間としての側面を記述する。そして、本節と次節で、感覚運動性の一人称性を論じる。

私たちは、環境（世界）に関する情報を自らの行為へと向けて活用していく主体である。情報を活用する主体としての私たちに関して第一に気付かれる点は、私たちの活用する情報は、自己中心的空間(egocentric space)の中で与えられるという点である。私たちの活用する情報は、自己中心的空間として構造化された領域内部に与えられている。自己中心的空間とは、「ここ」を中心とする、「そこ」「あちら」「向こう」とい

う位置（場所）的規定によってネットワーク的に構造化されている空間であり、また上下左右前後（高低、左右、遠近）という形でも分節化されている構造的空間である。この空間は情報の空間である（つまり認識の空間である）と同時に、行為の空間でもある。この空間には感覚面と運動面が共に属している。私は「そこ」にあるものに目を留め、その「そこ」へと手を伸ばす。

この自己中心的空間は身体空間でもある。この空間の内部に位置する対象、物は、その存在において私の感覚と運動を媒介しつつ繋げている。丸いボールを見て（感覚）、私はそのボールをつかむ（運動）。この一連の流れを考えてみよう。私はまず「そこ」にボールがあるのを見る。その際、そのボールをつかむために私はどのような方略を用いるべきか。ボールが身体（特に腕や手）に対して相対的にどのような空間関係を有しているかを私が知らなければ、私はボールに手を伸ばすことはできないだろう。では、わたしはボールを観察し、それとは独立に自分の身体像を観察し、両者の空間関係を見積もることで、初めてボールに向かってその身体像の手を伸ばすことができるのだろうか。

事実はそのようにはなっていないように思われる。自己中心的空間が本源的に身体空間であるならば、「そこ」は認識の向かう先として個別化されていると同時に、運動、行為の側面からも個別化されていると考えるのが妥当だろう。「そこ」とはそもそも初めから、「このように動けば手が届き、このように動けば身体が到達する場所」として、運動の側面、行為の側面からすでに個別化されているはずである。「そこ」にあるものがまず認識され、それからその場所にどうやったら手が届くのか追加的に考察されるのではない。「そこ」は認識された当初からそもそも「このようにして手が到達する場所」なのである<sup>9</sup>。

「そこ」にあるものを同定し、それとは独立に私の身体を身体像のもと同定して、両者の空間関係が初めて知られるのではない。「そこ」にあるものが同定されるその時点で、その「そこ」と私の身体との空間関係は、すでに把握されてしまっている。そのためにはおそらく、前庭感覚、固有感覚などの貢献が果たす意義も大きなものだろう。私は自分が利用できるあらゆる情報を「そこ」に手を伸ばすという行為へと向けて活用、利用する。

これまで自己の身体に関する知に関して述べてきたが、他者に関しては、その他者がある空間的位置にどのように身体的に対処するかを私が知るためには、その空間的位置と、そしてそれとは独立に他者の身体を同定し、その位置に対する他者の身体の空間関係を突き止めなければいけない。「そこ」と「他者の身体」を同定し、両者の空間関係を測る。しかし自己中心的空間内の位置に対して私の身体がどのように対処するかを決定するために、私は「そこ」を同定するだけでよい。私の自己身体に関する

---

<sup>9</sup> メルロ＝ポンティの「運動志向性」(motor intentionality) という概念は本節の議論と深く関連するかもしれない。

知は、私自身が「そこ」へと認識的に向かっているというそのことだけから（もちろん前庭感覚、固有感覚等々の働きに部分的に支えられつつ）、いわば「そこ」から遡及的に私によって知られている。「そこ」にある物を同定し、身体をそれとは独立に同定する、というのではなく、「そこ」にある物を同定する仕方の内にすでに自分の身体的位置や姿勢に関する知は組み込まれてしまっている。「そこ」が与えられるその仕方の中に、私の身体に関する私自身の知は埋め込まれているのだ<sup>10</sup>。

身体は常に何らかの行為のさなかにある。まず身体が知られ、そのあと付加的にその身体が知られるのではなく、身体はそもそも行為しつつある身体としてしか知られない<sup>11</sup>。「そこ」にある対象の情報を活用しようとする姿勢のなかで、身体は未来において実現する行為へとすでに身を乗り出してしまっている。「そこ」を認識し「そこ」へと態度をとることがすでに、自己身体をその主体的な側面において捉えることであり、そこで内側から捉えられた自己身体の現在の姿勢などに関する情報が、行為へと活用されていく。以上論じてきたように、自己中心的空間は、認識の空間であるとともに行為の空間でもある。次節では、この空間が感覚運動的な「私」の空間であることを、さらに論じていくことにする。感覚することの主体的な側面、また行為の主体的な側面は、「私」という観念から初めて十全に特徴づけられる。感覚運動性が「私」のものであるとは、つまり身体図式が「私」のものであるとは、どのようなことだろうか。

## 7 感覚運動的主体と「私」

本節では感覚運動性の一人称性を記述し、最後に身体図式の特徴づけを行う。

他者の認識と行為について私が知を得るためには、まず他者の身体が私によって同定されることが必要である<sup>12</sup>。つまり世界の内部に他者の身体像を私は認識しなければならない。その身体像へと情報が入力されることは、当該の他者が外界を認識することであり、そして、その身体像が運動することは他者が行為し、世界に働きかけるということである。他者の感覚運動性の私による認知は、このように他者の身体の同定を欠かせないものとして含んでいる。

では、私の感覚運動性はどのような形で成立しているのか。私という主体において感覚運動性が成立しているとはいかなることか。話は簡単である。前段落に述べた経緯から私による他者身体の同定を差し引いてみるだけでよいのである。他者の身体像

---

<sup>10</sup> 自己と他者の関係については、本稿は、私による他者の身体像の認知という点に話を限る。当然のことだが、他者に関する哲学的問題はそれよりはるかに広大である。

<sup>11</sup> 情報活用は何らかの行為の文脈で行われる。したがって行為の文脈が異なれば、一見同じと思われる情報がその新たな行為の文脈では活用されない、ということも起こるかもしれない。メルロ＝ポンティの言及する脳損傷患者シュナイダーの症例では、シュナイダーは医師であるゴールドシュタインに会うためにいつもゴールドシュタインの家に行くのだが、その目的を持たず彼の家を通り過ぎる際には、もはや彼の家を認識しない。

<sup>12</sup> この点も、本稿の関心の枠内では、という限定上の議論である。他者の身体の観察に限定されない自他関係の領域は、広大である。

が引き払われたからには、残るのは世界である。私に世界が与えられ、その世界が認識面では私に情報を与える源泉であり、運動面では私の行為、働きかけを受けるものとしてあることになる。そしてこの時点で、私の感覚運動性は成立してしまっている。私は、私の身体像を同定する必要がない。他者の身体の同定を差し引いた代わりとして、自己の身体の同定を持ってこなければならない、というわけではないのだ。

身体の同定の不要性ということについてももう少し考えてみよう。他者が何か危険な対象に遭遇し、その状況に何らかの振る舞いをする事で対処するという場面を考えてみる。たとえば他者は近づいてきた猪に襲われそうである。このような状況を私が認知し、他者の状況について理解を得るためには、私はやはりまず他者の身体を同定しなければならない。その身体と猪との距離を見積もり、他者が危険かどうかを判断する。「闘争か逃走か」という課題に他者が逃走という解決を与えるならば、そのことを私が認識するためには、やはり私は他者の身体を同定し、それが猪から逃れ去っていく様子を観察しなければならない。

今度は、私と猪との遭遇を考えてみよう。いま、自己中心的空間の内部に危険な猪が出現したとする。たとえば「あそこ」に猪が出現したとする。前段落に述べた内容とは対照的に、私は自分の身体を観察し、そのことでえられた身体像と猪の空間関係を見積もって初めて、猪が危険なほど近くにいることを知る、というわけではない。自己中心的空間内部の特定位置、つまり「あそこ」に猪が現れたというただそのことを認識するだけで、私は猪と自己身体との危険なほどの接近に関してすでに十全な知を獲得してしまっている。さて、「闘争か逃走か」という課題に私は逃走という解決を与えよう。逃げていく自分の身体像を同定しなければ、私は自分の逃走という決定に関して知を得ることはできないだろうか。そのようなことはない。「あそこ」に猪を同定するだけで、そこで存命を図りたいという欲求とその手段に関する思考を媒介させつつ、私は逃走という行為可能性へと自己身体の内側から開かれてしまっている<sup>13</sup>。

私が R.S. (Ryo Sakakura) であるとはどういうことであるかということ、私が R.S. の身体の内側から R.S. の身体運動へと向かって行為可能性を自由に展開しているということである。そのような行為主体としての私はまた、自らの行為へと向かって世界の情報を活用するところの認識主体でもある。私は R.S. の身体を自由に動かせる。他人の腕をつかんで引っ張ったりするのは違い、私は R.S. の腕を内側から自由に動かすことができる。R.S. の腕を自由に動かすこの同じ私が、R.S. の感覚器官を使って世界を認

---

<sup>13</sup> このような認識と行為とのつながりは、もしそれがアルバ・ノエの主唱するエナクティブ・アプローチにおいて知覚と行為の関係に関して主張されているように、両項の構成的な関係として成り立っているものであるならば、そのような認識と行為の私におけるつながりは、私の認識と他者の行為、あるいは他者の認識と私の行為とのあいだのつながりと対照をなすだろう。私における認識と行為とのつながりにおいて、認識の内容を行為に貢献させるために、言語伝達の介在などが必要とされないという事実を、そのような構成的関係の観点から説明することも、確かに見込みある試みである。しかし本稿においては、私における認識と行為の関係が構成的か否かという問題に関しては、態度を開いたままにしておく。

識しもする。世界を認識して得た情報を、R.S.の行為へと向けて活用するのである。

R.S.の身体を自由に動かせる私は、世界を認識する私でもなければならぬ。世界を認識して得た情報を活用するのでなければ、R.S.、つまり私の行為は世界に対して適応的とはならないだろう。行為主体としての私は、認識主体であるのでもなければならぬ。また、私は世界に関する情報を収集するだけでは不十分で、それを自らの行為へと活用しなければならぬのだから、認識主体としての私は、同時に行為の主体でもなければならぬ。このようにして、認識と行為は「私」によって結びあわされている。私とは感覚運動的の主体である。情報活用の主体と行為の主体は同じ一つの主体であり、つまりは「私」なのだ。そして、その私が保有している認識と行為を繋ぐ能力、技能こそが、私の身体図式なのである。本節で前段落までに述べてきた「身体像の観察同定」とは全く異なったものとして、身体図式の保有は語られなければならない。身体図式とは、私が自分の身体に関して、あるいは私の身体がそれ自体において保有しているところの、私の知覚と運動が活動する自己中心的空間を開く能力、つまり感覚と運動を繋ぐ能力、技能のことなのだ。2 節最後の身体図式の特徴づけに何が加わったのかというと、身体図式が本質的に一人称的であるという点、また主体の技能、習慣として言及されていたものが具体的に感覚運動的の技能として特徴づけられた点、世界として言及されていたものが自己中心的空間として具体化された点、である。

## 8 同定される身体が私自身であることを私が知るのはいかにしてか

ここまで、身体図式を自己の身体の感覚運動的な側面に関連させつつ記述してきた。それとは対照的に、他者、あるいは他者の身体に関する知識に関しては、身体像の同定が重要なファクターである経緯を繰り返し強調してきた。では、私の身体像は、私の感覚運動性や身体図式と関連する重要な意味など何も持たないのだろうか。本節では、この点を問題にしてみたい。

R.S.の身体像が私の身体像であるとはいかなることだろうか。R.S.の身体像が私の身体像であることの私における理解の実質とはどのようなものだろうか。

私がある特徴を持つことを私が知っており、その同じ特徴をある身体像が持つことを認識し、そのことに基づいて「私=その身体像」という同一性判断を下すことで、私はその身体が自分自身であることを認識するに至っているのだろうか。このような経緯によって獲得される自己知に関しては、「同定に基づいている」と言うことにしよう。

私の身体を、私は、他者の身体を眺めるような仕方で眺めることはできない。他者の身体像は、私の眼前に全体的に提示されることが可能である。しかし私の身体像に関しては、まず、顔や背中については（鏡を利用するのでもなければ）まったく見る

ことができないし、足を見るためには、他者の足を見る場合とは異なり、私が立っているのであれば、私は俯いてそれを観察するのではありません。つまり私は、私自身の身体を断片的なものとして観察できるのみなのである。

ある特定の身体に関する像が私の身体に関する像であること、このことを私はいかにして知っているのだろうか。この私の身体は、その与えられ方は異なるとはいえ、他者もまた観察することができる三人称的な対象である。客体的対象、と呼ぶことができる。ではこの客体的な対象、三人称的な対象が有する何らかの特徴や性質が私固有なものであるからこそ、私は「私＝この身体像」という判断を行うのだろうか。つまり、この身体像が私自身の身体についての像であることを、私は同定に基づく同一性判断のもと理解しているだろうか。

もし、この身体像が私の身体の像であるということはこの身体像の何らかの特徴を手掛かりとして知ろうとするならば、私の努力は徒労に終わるだろう。では次のように考えたらどうだろうか。この身体像が私の身体の像であるということを決定づけるのは、この対象の属性ではなく、この対象が与えられるその与えられ方 (mode of presentation) である。立っている時には、俯くのでなければ足を見ることができない。「俯くことによって見られる」というこの足の与えられ方のゆえに (つまりこの足そのものに属している何らかの属性のゆえにではなく)、この足は私の足だということが私に分かる。なによりも、私の身体像は私の自己中心的空間の中心に位置している。

一見以上のようにも思われるかもしれない。そしてそのような考え方は正しい方向に向かっていると考えられる。しかしこのような経緯よりも、次の事実の方こそがこの身体像が私自身であるという私の判断を支えている、と本稿では考える。まず、私の身体像は自己中心的空間の中心に位置している。自己中心的空間の中心に位置する、というのはこの身体像の私に対する「与えられ方」である。しかしこの身体像が自己中心的空間の中心にあると言える時、見逃してはならない点がある。それは、私がまさにこの中心点、自己中心的空間のゼロ点「から」自分の身体を眺めない限り、身体像は自己中心的空間の中心に位置するという仕方で私に与えられることはできないだろう、という点である。私は私の世界の王様であるが、私にとってだけ、その王様は王様である。このようにして、ある仕方で (つまりそれが自己中心的空間のゼロ点に位置するという仕方で) 与えられる対象 (つまり身体像) の方から、その対象がそこへと与えられている、観察する主体の方へと、注意の焦点を移行させることがいま取り組んでいる問題の解決のための鍵だと考えられる。

この点に関して決定的に重要なのは以下である。この「観察する主体」、「情報を活用する主体」、自己中心的空間のゼロ点「から」身体を観察している主体、主体としてのこの私は、そこで自己中心的空間のゼロ点「に」観察される身体それ自身 (と同一) である。つまり、自己中心的空間のゼロ点からその中心に身体を観察同定するという経験は、その観察される身体が主体として自分自身を観察同定する経験と一つの同じ

経験（トークンの、数的に同一の経験）である。そして、私と観察される自己身体とがトークンの、数的に同一の経験を有しているなら、両主体はまさに同一の主体なのだということも、私に理解される。このように、観察される身体が、自分自身を眺めており、それは私である。だからこそ、私はその身体の顔面や背中は見ることができないのだし（顔面と眼球の構造上、顔面についている眼は自分自体（と自分が属する顔面）を見ることはできない）、足は俯かなければ視界に入っては来ないのである。身体が自己の顔面を見ることができない構造になっているからこそ、私が視野のゼロ点にある身体の顔面をみることができない時、そうして私が見ることができないのは「自分の」顔面であり、また、その顔面を見ることができていないのはその顔面が属している身体それ自身でもあることを私は理解するのである。私が「見えない顔面」を持つ身体を見ようとしていることは、自分自身を見ようとしていること、つまり私が私自身を、そしてその顔面が見えない身体自身が自らを見ようとしていることなのだ、ということ私を理解している。この意味で、「観察する主体」、「情報を活用する主体」、つまり私は、ゼロ点に位置するこの身体自身なのである。私は、この身体像が私自身であること（私＝この身体像）を、客体のレベルで、つまり観察される客体、身体像のレベルで、何らかの对象的属性を手掛かりとした同定に基づく同一性判断によって知るのではない。私は、この身体像が私自身の身体像であることへの理解を、この身体を眺めている「観察する私」と、この身体を眺めているこの身体それ自身とが同一であることを理解することによって、つまり観察する主体のレベルにおいて成立している両主体の同一性の理解によって、保持しているのである。

## 9 結語

本稿では、感覚運動性を、情報を活用する主体と行為を展開する主体の観点から特徴づけた。両主体はともに「私」と規定された。そして、身体図式を、情報を行為へと向けて活用し、その情報に基づいて実際に行う「私」が活動しているところの空間性、つまり自己中心的空間、を私に対して開く、私の運動感覚的スキル、能力のこととして論じてきた。この意味で、身体図式は極めて一人称的であるということを強調してきた。

その一方で、身体像は、身体を観察される相のことであり、三人称的であると論じてきた。つまり、誰にでも観察できる客体的なものである。しかし、ある身体像が私自身の身体についての像であると私が正しく判断する時、私は何らかの身体属性に手がかりを置いた同一性規準をもとにしてそう判断しているのではない。この同一性の認識の相においても、私の主体的な在り方が重要なものとして際立ってくるということを最終節で論じた。

私の獲得した情報が他者の行為に、他者の獲得した情報が私の行為に利用、活用さ

れるためには、言語伝達による媒介などが必要とされる。対人的コミュニケーションの実際には本稿では踏み入らなかった。この点の解明なども、さらなる課題として残される。

#### 参考文献

- Evans, G., (1982) , *The Varieties of Reference*, Oxford University Press.
- Gallagher, S., (1998) , “Body Schema and Intentionality,” in *The Body and the Self*, The MIT Press, pp. 225-244.
- Noë, A., (2004) , *Action in Perception*, The MIT Press. [ 『知覚のなかの行為』 , 門脇俊介, 石原孝二監訳, 春秋社, 2010 年。 ]
- Perry, J., (2002) , ”The Self, Self-Knowledge, Self-Notions,” in his *Identity, Personal Identity, and The Self*, Hackett Publishing Company, pp. 189-213.
- (2011) , “On Knowing one’s Self,” in *Oxford Handbook of The Self*, Oxford University Press, pp. 372-393.

- 
- アンリ・ベルクソン, 『物質と記憶』, 杉山直樹訳, 講談社, 2019 年。
- モーリス・メルロ＝ポンティ, 『知覚の現象学I』, 竹内芳郎, 小木貞考訳, みすず書房, 1967 年。
- 『知覚の現象学II』, 竹内芳郎, 木田元, 宮本忠雄訳, みすず書房, 1974 年。

(さかくら りょう／文教学園大学 非常勤講師)